師匠のグッド・バイ

Ｃコース２００万

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18490996

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, モ腐サイコ小説50users入り

高級娼婦を裏でやってる師匠にのめり込んでいきつつあるエクボの話です。エク霊２話目です。

Table of Contents

Ｃコース２００万

相談所に霊幻だけになったのを見計らって。
俺様はふらっと相談所を抜け出して、適当にその辺を歩いていた寝不足の男を捕まえて憑依する。
公衆電話のブースに入って、そいつの金で覚えたての番号に電話した。
『……はい、霊幻です』
あいつの裏の仕事用の携帯だ。
「俺だ。エクボだ」
『本日はどういったご用件で？』
「Ｃコースで予約したい。いつなら空いてる？」
『……正気か？』
「オイ、リピーター様に失礼だろ」
は〜っ、と電話口の向こうから長いため息。
『手頃な値段でいい娼婦知ってるから、紹介しようか？頼むよ、知り合いとヤルのはしんどいんだよ』
「馬鹿野郎、知ってる奴だから面白いんじゃねぇか。ほら早く、Ｃコースだ」
『……明後日か、５日後なら。時間は昼の１時から翌朝の１０時まで。晩飯と朝飯には付き合えるぜ』
「おー、じゃあ明後日で」
『……オプションどうする？恋人とか、上司部下とか、ハジメテのふりとか、好みのやつできるけど』
「じゃあ恋人で」
ニヤニヤしながら俺様が言うと、また大きなため息が電話口から聞こえてきた。
『物好きだなぁ。なんでこんなオッサンをそんな大金払って抱こうってんだよ』
「おまえそれ他の客に失礼じゃねぇの？」
ぐ、と霊幻が黙り込む。
『みんなほんとワケがわかんねぇよ……ま、いいや。明後日の１時

にあの駅で。じゃあな』
電話は一方的に切られた。俺様はちょっとあんぐりと呆れている。
……あいつ、自分の価値を分かってねぇのか……？
この間抱いた霊幻は、サービスも飛び抜けてたし、フェラもアソコも一級品だったし、高級娼婦の名に恥じない最高のオンナだった。愛嬌も色気も１００点中１２０点だ。俺様は「なるほど安売りしないわけだ」と１人合点がいってたというのに。
そういう謙虚？なところも客を離さないのかね。知らねぇけど。
……高級男娼やってるのにその自己評価の低さはちょっと危ういな、と俺様は少しだけ心配になった。

憑依を解いて相談所に戻る。
と、シゲオが遊びに来ていた。
「師匠、明後日は休みなんですか？」
「おお、出張除霊が入ってな。蔵の掃除だそうだ」
「大丈夫ですか、１人で」
「芹沢もいるし、心配ねーよ。あ、そうだ。お前に見てほしいものがあるんだが……」
うーむ、素晴らしい面の厚さだな。いつもの顔をぴくりとも崩さずに、男とエッチする予定を弟子に話してやがる。上手く誤魔化しながら。実際これまで俺様も誤魔化されてきたんだから、こいつは大した女優だ。
「……？何ニヤニヤしてるの、エクボ」
おっといけねぇ。俺の方が顔に出てた。シゲオに指摘されて何でもねぇよと返す。……余計に訝しがられた。難しいな、オイ。
チラッと霊幻を見ると手を口元に持って行って笑いを堪えてやがる。
「わるいわるい。さっきまでエクボと映画の話しててな、トマトがヒトを襲うヤツ。思い出し笑いだよ」
「……また変な映画観てますね、師匠は」
また霊幻に誤魔化されてやがる。裏事情を知ると面白い光景だな、コレ。
それからたわいない話を沢山して。

……そんな日常が続いていたから、俺様は当日まで、コイツを買ったことを忘れていた。

※

いつも通り相談所でブラブラしてたら、芹沢が時計を見て立ち上がった。
「じゃあ、お疲れ様です」
あれ？まだ昼の１２時じゃねぇか。今日は早上がりか？
「おー、おつかれさん」
パソコンから目を上げずに霊幻が返す。
芹沢が相談所を出たら、締め作業をした後、営業中の札をひっくり返して、霊幻も薄手のコートを着て帰り支度を始めた。
「オイオイ、今日は午前で終わりかよ。先に言っといてくれよな、そういうの。俺様だって予定ってもんが……」
俺がそう言うと、ぽかんと霊幻が俺を見上げた。
……あっ、あー！俺が買ったんじゃねぇか、コイツの時間！！
「悪ぃすぐ身体調達してくる！！」
「……１時に間に合えばいいぞ。俺はメシ食ってから向かうから」
何か霊幻が言ってるが聞いてる余裕は無ぇ。いつもの守衛のところに行くと、ベランダで不採用通知を握りしめて黄昏てたので、ひゅぽんと身体を借りた。こいつとは就職するまでは時間千円で身体を借りる契約をしてる。今は無許可だか暇そうだったし問題ないだろ、金さえ後で渡せば。
守衛のボロアパートから相談所までは徒歩で５分ほどだ。急ぎ足で行けば、相談所から駅に向かう霊幻に追いつくことができた。
「お、その人借りれたのか」
「俺様こいつと契約してるからな」
「どおりで良く見ると思った」
霊幻は駅前の焼肉屋に入る。入り口でコートとスーツの上着を預けて、慣れた様子でカウンターに座った。
「レバニラ定食にハラミ、豚バラ」
「あっじゃあ焼肉定食で」

めっちゃ食うじゃねぇか。いつもの１.５倍は食ってる気がする。
食事が届くと、霊幻は流し込むようにガツガツと食べ始める。
肉を貪り、米を詰め込み、水で流し込む、ってな具合だ。
「オイ、そんなに食って大丈夫かよ」
「……これぐらい食わなきゃもたねーんだよ」
霊幻は少し顔を赤くしてぼそっと言う。あ、そっか、場合によっちゃあ１時からぶっ続けでセックスだもんな……。
想像して勃ちそうになった。やべ。別の事考えよ。
俺様は慌てて焼肉定食をかっこんだ。美味い。少し高いが、いい店だな。
「ごっそーさん」
霊幻が金を置いて席を立つのに倣って、俺も立ち上がる。
霊幻は店員の差し出すガムを受け取って俺に２枚とも渡し、懐からタバコケースを取り出した。
焼肉屋の前にある喫煙コーナーでケースを開ける。中に入っていたのは、手巻きのタバコ数本と、おそらくブレスケアみたいな錠剤だ。
霊幻は渋い顔をしながら錠剤を噛む。その後、手巻きの何かを取り出して火を付けた。
……めっちゃくちゃ甘い香りがする。なんだありゃ。何かの香か……？
霊幻はまた渋い顔をしながらそれを吸う。美味くはなさそうだ。
「何だよ、ソレ」
「ん？あぁ」
霊幻は周りをチラッと確認してから、ちゅっと俺にキスをした。
！？！？！？！？
鼻に抜ける甘い麝香の匂い。舌にトロけるハチミツの味。
うそだろ、この一瞬で、さっきまでレバニラ食ってた男の口の中を、極上の甘味に変えやがった。
「こーいうことだよ」
そう言いながら香を吸い続ける霊幻。徹底してんなぁ、コイツ。
薫香のお陰で、俺や霊幻の服に染み付いてた焼肉屋の臭いも薄れていく。

トドメとばかりに霊幻は手首に香水をかけていた。シャネルの５番だ。なんでそんなものを、と思っていたら、さっきの麝香と、霊幻の体臭と混ざって、何とも言えない男好きのする匂いになって理解した。そそる匂いだ。……ホント俺相手でも手を抜かないのな、お前。そういうとこ好感が持てるぜ。
「行くぞ」
もう随分といい時間になっていた。電車で待ち合わせの駅に行く。
ケツモチのマサがもう車で待っていた。
「先払いな」
俺と霊幻は車に乗り込み、俺は２００万入った封筒を霊幻に手渡した。
霊幻はバラっと扇状に札束を広げて、高速で数えていく。銀行員かよ。ホント小器用だな、お前。
「確かに」
そう言ってそこからケツモチ代を取って、マサに渡した。
マサが訝しげに俺を見ながら札を数える。
金の出どころが気になるか？詳しくは教えてやれねぇが、まぁ、新興宗教の教祖って儲かるよな、ってこった。
「……確かに頂戴しました。霊幻さんの分も一旦預かります。今日はコレを持ち歩いて下さい」
ケツモチのマサは俺と霊幻に防犯ブザーみたいなものを渡す。
「ＧＰＳ兼防犯ブザーです。今日は自由にしてもらっていいッスけど、霊幻さんがソレを鳴らせばいつでも乗り込みますから」
「……ちゃんとしてんなぁ」
「いちおう稼ぎ頭ッスからね、霊幻さんは」
「一応って」
「損害も酷いんっすよ」
霊幻が苦笑する。マサが車を降りて、霊幻の側のドアを開けた。
「ほい、いってらっしゃい」
マサのエスコートを当然のように受ける霊幻。ううむ、貫禄がある。
「どっか行きたいとこあるか？直接ホテルでもいいぞ」
するり、と手を恋人繋ぎされてびっくりした。

ああ、そうか、そういうオプション頼んだっけ。
コイツ手ぇすべすべだな。男っぽいゴツゴツした感じに、吸い付く肌のアンバランスさがいい。俺はこれ幸いとすりすりコスコスと霊幻の手を弄り回した。
「んっ……えっちな触り方すんなよ……ホテル行く？」
えっちて。お前が口にするからえっちなんだろうがよ。いかん早速混乱してきた。
「いや、お前のおススメでどっか連れて行ってくれ」
「分かった」

そして俺様と霊幻はボートレース場にいた。
……いやなんでだよ！！
「何から見て回る？ここは博物館と水族館、屋台とレストランがあるぜ。あとお土産コーナーも。っと、忘れてた。せっかく来たんだから賭けないとな！」
くそっ、色気のねぇ！でもワクワクしちまって悔しいっ！なんつったって基本的に男向けの施設だから、見るもの全てが俺を誘惑してくる。
取り敢えず俺は無難に人気の舟券を単勝で買い、霊幻は大穴の３連単を買っていた。
「まず博物館行ってみるか？」
する、とまた霊幻が手を繋いでくる。思わず周りを見るが、ここまで堂々としてると、案外誰も気にかけないものだ。俺様はまた親指で霊幻の手の甲をすりすりと触りながら、博物館に向かった。だってすべすべで気持ちいいんだもんよ。
博物館ではボートレースについての展示は勿論だが、何故かインスタント食品の展示と幽霊の展示をしていた。脈絡ねぇなぁ、おい。
「あ、レースが始まるぞ」
博物館の前にあるモニターでレースの様子が映し出される。
え、え、え、おい、うそだろ……！
「当たった……！」
「やったな！」
２人してきゃっきゃと喜ぶ。やべぇ楽しい。

それから適当にボートレースの展示を見て、レースの勝敗にハラハラして、インスタント食品の展示場で霊幻の蘊蓄をきいて。幽霊の展示をけちょんけちょんに俺様がけなして、博物館を出た。
「おっまえ言い過ぎじゃね？」
「うるせー幽霊の展示のくせに柳田國男のやの字も出さねぇなんて、許せねぇんだよ俺は」
「変なとここだわるのな、おまえ……まぁいいや。勉強になったわ」
ふん。なにしろ本物の幽霊の講釈だ。ありがたく聞きやがれ。
「えっ……えっ、え、え、嘘だろ！」
レースを映したモニターを見ながら霊幻が興奮した声を上げる。手元を見ると、まさに当たりそうな大穴の舟券があった。
「オイオイオイマジかよ！」
「いけっ！このまま、このまま……！……あー、ダメだったか」
結局最後に人気のレーサーに抜かされて終わった。
「もうちょっとだったよなー！」
でも興奮は醒めやらない。結局最初の一枚だけが当たったのだが、それでも俺たちはボートレース場を充分楽しんでしまった。
「どうする？そろそろメシ行く？」
気がつけば夕方近くなっていた。
「俺の行きつけのラーメン屋行くか？それとも屋台覗いてみる？」
「あ、いや……レストラン、予約してあるんだが……」
思わず口籠もってしまう。なんだか俺様だけが張り切ってるみたいで、気恥ずかしい。
「……嬉しい」
一瞬きょとんとした霊幻は、はにかんでそう囁く。それだけで予約した甲斐があったと思ってしまったから、もう駄目だわ、俺。
「じゃあ行こうぜ」
次はするりと腕を組んでくる。密着する体温が心地よい。精神の方がふわっと暖かくなって、ああ、術中にハマってんなぁと苦笑する。
今はコイツは、俺の恋人だ。
シゲオのことも芹沢のことも忘れて、霊幻が俺を蕩けた目で見つめ

てくるのは、最高に気分がいい。
もちろん本当にはそうじゃないことは分かっている。が、心が誤解したがってんだ。今はその錯覚に酔いしれたい。
何しろ楽しかったんだ。コイツとのデートが。
次はベタに動物園とか連れて行きてぇな、と思うくらいには。
物思いに耽っているうちにレストランの入ってるホテルに着いた。
予約名を告げると、奥の窓際の席に案内される。
……あ、やべ。緊張してきた。こんな店来るの、こちとら初めてだぞチクショウ。
「なんか緊張するな、こういうとこ」
ひそ、と顔をこわばらせた霊幻に言われて。
一気に緊張が解けた。
「……ラーメン屋と変わんねーよ」
席につくと前菜とワインが運ばれてくる。
「美味いな、これ」
霊幻は少しだけワインを味見して、食事を摂り始めた。
……やれば綺麗に食えるんじゃねぇか、お前。あ、でもサラダ食うの下手だな。可愛いな……ん！？
「どうしたんだよ、食わないのか？」
いかんいかん、こいつは俺のモノだとか思いながら見てたら、思考が変な方向に飛んだ。メシに集中しよう……。
「フォアグラのステーキでございます」
給仕が運んできた肉にナイフを通す。
ん、ワインに合うな、コレ。
「これ美味いな！」
ステーキを食べ、ぱぁぁぁっと霊幻の顔が輝く。
かっ…………。
…………高いメシ用意して良かった…………。
というか、こいつと笑い合いながら食べると、何食べ飲みしてもめちゃくちゃ美味く感じる。
いよいよヤバいところに足を踏み込んでる気がするが、俺様は何百年かぶりの愉しみにぞくぞくしていた。
「ご馳走様でした」

財布を取り出して伝票を見ようとする霊幻にぎょっとする。
いやいやいや。セックス前のメシぐらい驕るに決まってんだろうが。俺を甲斐性なしにするんじゃねぇ。
「いいのか？」
「当然だろーが」
「……ありがとな」
ふんわりと霊幻が笑う。……いつもそういう顔してりゃあ普通にモテるんじゃねぇの、お前。
俺は伝票を手に取りながら、ホテルの部屋のカードキーを一枚霊幻に手渡した。このホテルはラブホじゃねぇから、男で連れ立って部屋に入るのは目立つ。
「あ、じゃあ俺は喫煙所に寄ってから行くわ」
霊幻は心得たもので、俺と時間差で席を立った。

※

……落ち着かねー。
ホテルの部屋の風呂で身体を念入りに洗ってから上がり、湯船に湯を張って霊幻を待っている。
バスローブがスカスカするように感じてきた。早く来いよアイツ。
実際は５分も待っていないが、時計を睨みながら待つとすげー長く感じる。今度からこの待ち方は止めよう……。
ピピ、とカードキーが認識された音がして、扉が開いた。
「待ったか？」
ふわり、とムスクの匂いをさせて。
霊とか相談所の所長が、入ってきた。
俺のナワバリに入ってきた霊幻に、ぐわっと興奮が沸き立つ。
「あ、ちょっ」
どん、とドアに押し付けて、唇にむしゃぶりついた。
「ん……」
すっと目を閉じた霊幻が口を開いて俺を受け入れる。
柔らかい霊幻のベロを吸い出して食むと、トロリとソフトクリームみたいな触感がする。甘いハチミツとクリームの味。それに生々し

い肉感が混じって、ビリビリと脳髄を痺れさせる。
「んぁっ……ふぁ、う……」
ベロの裏、歯列、喉の奥。どこもかしこも甘くて美味い。夢中で貪っていると、どさりと荷物を足元に落とした霊幻が腕を回してきた。
「はぁっ……なぁ、俺、汗くさいだろ？シャワー浴びてくるから、ぁっ」
ぐい、と膝で霊幻の股間を擦りあげてやると、声が上ずった。
「どうせ後ろは準備してあるんだろ？じゃあこのまま食わせろ」
ベロリと見せつけるように舌なめずりすると、霊幻が身体を震わせる。
「──相談所の匂いがするぜ、所長」
かぁっと霊幻の顔が赤くなる。どうも相談所のことを持ち出されると、途端に恥ずかしくなるらしい。
「もう、勘弁してくれよ……」
そ、と耳に口を寄せて来て。
「──残さず食えよ？」
この悪霊様に、とんでもない殺し文句をのたまってくれた。

コートを床に落として、ベッドの上に霊幻を押し倒す。
ノリの効いたグレーの吊るしのスーツに、ピンクのネクタイ。
『あの』霊幻新隆が、ベッドの上で、俺の手を待っている。
「なぁ、フェラとか……」
「それは今度でいい。とにかく俺様、お前をいじりたおしてぇんだよ」
服の上から霊幻に触れる。胸、腹、男にしては細い腰。揉み応えのあるケツ。すらっとしてる足をツツ、と指で辿ってから、じっくりと太ももの内側を手のひらの熱を移すように撫で回した。
「……っ、ん……」
「なんだぁ？勃ってきたか？」
むぎゅっと芯の入り始めていた股間を無遠慮に掴むと、あっと霊幻が鋭い声を上げて顔を背けた。
「……そうだ、霊幻。抵抗してみせろよ」

「え？」
「俺様は『世紀の天才霊能力者』霊幻新隆を犯してみてぇんだよ」
す、と霊幻の瞳から、甘さが消えていつもの胡散臭さが宿った。
あ、と思う暇も無かった。
「どけ、この野郎」
手加減無しの頭突きが飛んできて、俺は上体を仰け反らさせられる。
がっとベッドを蹴った霊幻に上下をひっくり返され、拘束した腕の上にどっかりと座られた。
……そうだった、こいつも１７９センチのガタイのそこそこ良い成人男性だったわ……。
「……と、まあ。本気で抵抗するとこうなるわけだが、どうする？」
にっこりと笑う霊幻。
「……なんか怒ってねぇか？」
「いや？ただ、そっちの霊幻新隆も抱けると思われてるなら心外だなぁと思ってるだけだ。霊とか相談所ではそんな依頼は受けてねーんだよ」
「……悪かったよ。なんか口だけでイヤイヤ言うだけとかにしといてくれや」
「分かった」
霊幻が俺の腕の上からどく。
がっ、と手を掴んで、俺はもう一度、霊幻を押し倒した。
「ちょっ……やめろよ」
霊幻が身じろぎして俺を押し返そうとするのを押さえ込む。
「くっ……何する気だよ」
キッと霊幻が俺を睨んでくる。
ゾクっとした。擬似レイプも悪くない。
「何って、ナニだよ」
お約束の悪役セリフを言いながら、グレースーツの胸元に手を差し込む。
「ゃっ……あ、あぁっ……」
「おやおやぁ？霊幻センセは乳首が弱くていらっしゃる？」

かぁっと霊幻の頬がに血が上る。
「ぁ、あんっ……ゃだ、触るな……アっ！」
ぴん、と固くなってきた先端をシャツの上から指で弾くと霊幻の腰が反った。
勃起した乳首がシャツの上からでも浮いて見えるのもエロくていいが、そろそろストリップといこうか。
「おい、何考えてやがるっ」
霊幻のネクタイを抜いて、手首を柔らかくしばる。
「ぁ……」
絶望した顔の霊幻が、カタカタと震えるのが、見てて愉快だ。
つーか本当に心得てやがるな、コイツ……。
「痛い目に遭いたくなけりゃ、暴れるんじゃねぇぞ」
ぷち、ぷちと焦らすようにシャツのボタンを外す。
少しずつあらわになる胸が、それでもやっぱり所長のガワを被っているのに、どうしようもなく興奮した。
「ん、っ……」
シャツの下に手をくぐらせて異質な皮膚に触れる。霊幻はハッと身体をこわばらせた。
「男の胸なんか触ってどうすんだよ」
「うるせぇ乳首大好きな癖によ。ほらイくとこ見ててやるから、乳首でイって見せろよ」
ぐいっとシャツを広げて、俺様は尖らせた舌で何度も乳首の先端を掠める。
もう片方は親指の爪端でツンツンとつついてやった。
「！？やっ、あっ、嘘だろ……っ」
本気の乳首責めに霊幻の声が甘くなる。
気を良くした俺様は乳首の乳輪ごと口の中に吸い込んで、勃起部分をレロレロと舌全体で弾いてやった。
「ダメいくってあぁ……っ！」
じわ、とグレースーツの股間が濡れそぼる。
「おーおー、レイプ魔に乳首いじられて粗相しちまったな？お前このスーツ着るたびに今日のこと思い出すんだろうなぁ、はしたなくイったこと」

かぁぁぁっとまた霊幻の顔が赤くなる。あーたのしい。
さてと。そろそろメインディッシュだ。
カチャカチャと霊幻のベルトを外し、ズボンを脱がせる。
「はは、糸引いてんぞ」
霊幻に見せつけて恥じらった顔を見るのも忘れない。ボクサーパンツなんかぐちゃぐちゃで、霊幻の口に突っ込んでやろうかと思ったが、趣味じゃないのでやめておいた。嬌声きいてる方が楽しい。
「やめっ……やめてくれ……」
懇願する霊幻がまた青い顔でカタカタ震える。
俺様はすべすべした太ももを手のひらで堪能しながら、霊幻のアナルを指で押し込んだ。
……つぷっと簡単に指が入ったし、中から仕込んだローションがトロリと溢れた。そりゃそうだよな、準備して来てるはずだわな。
一瞬頭が冷静になるが、せっかくレイプごっこしてるので、もう少し楽しむことにする。
「い……っ」
痛がる霊幻の様子を見ながら、指を増やしていく。
「おーおーナカがきゅうきゅう絡みついてきやがる。オトコが欲しいって下の口は正直だなぁ？」
「そんな……っ、も、抜いて……っあ゛！？」
霊幻が目を見開いて俺の指をギチっと締め付ける。突然余裕の無くなった霊幻に俺様は慌てるが、ああ、イイ所に当たったのかと合点がいって落ち着いた。
「んー？ココかぁ？」
にやにやしながら指を増やして内部を探ると、腹側の一点で霊幻は身体を硬直させた。
「そこっ……ホントにダメだからっ……」
「それ言われて止める男がいたら見てみてぇわ」
コリコリぐりぐりぴしぴしぐっぐっ。
「〰〰〰〰〰〰〰っ、ゃだぁ……っ！」
スーツがシワになるのも構わず、霊幻は大きく身体を捻ってメスイキの衝撃に耐える。いけねぇ、痕になりそう、と思って俺はこっそりネクタイの拘束を解いた。

「何自分だけ気持ちよくなってんだよ。おら、そろそろ挿れっぞ」
「へ……？あ、い、いやだっ！誰か、たすけ……っ」
じたばたする霊幻を軽く押さえつけて、ズボンの前をくつろげる。
とっくの昔にバキバキになってたチンポを、まだうねってる内部にねじ込んだ。
「あ、ぁ……っ！」
くん、と顎を上げた霊幻の目尻から涙が一筋落ちる。あー、征服感やべぇな、これ。
「いっ、いたっ、いてぇよっ、うぅっ、もうやめてくれぇ……っ」
ずこずこ揺さぶると、ボロボロ泣きながら俺のスーツに縋る霊幻。
「だ、大丈夫か？」
思わず俺が素に戻ってしまった。霊幻がぐいっと俺を引き寄せて、
「目ぇ乾燥させて泣いてるだけだから気にすんな」
とぼそっと言ったので、続行することにした。いやすげぇなお前。
「ぁっ、あがっ、うう、なあ、ゴム、せめてゴムしてくれよ……」
「はぁ？するかよ面倒くせぇ」
中出しＮＧだったらどうしよう、と少し考えたが、おそらくこの流れを許してくれるなら大丈夫だろ……たぶん。
「いやだっ……これ以上俺を穢さないでくれよ……！」
すまんソレめっちゃ興奮するわ、所長。
ずん、とさっき見つけた前立腺をえぐると、悩ましく霊幻の顔が歪む。
「ゃあ……んっ……」
「……犯されて感じてんのか？」
「……！」
涙で濡れた瞳で睨みつけられて、もう、単純に、興奮する。
「ダメだ、あ、あぁ……っ、イきたくないぃ……っ！」
霊幻の背が弓なりになって、トロ、と陰茎から精液が落ちる。
「〰っ、出るッ……！」
俺はゴシゴシ裏筋をすりつけるようにしながら肉感を味わって、霊幻の中に欲を叩きつけた。

「あーあ、スーツが……」

俺がビールを飲みながら休憩してると、霊幻がぶつぶつ言いながらスーツを片付けはじめた。
「そんぐらい弁償してやるよ」
「馬鹿、突然新しいスーツで行ったら芹沢とかに怪しまれるだろーが。いーよコレ洗えるやつだから」
ズボンを手早く洗面所で洗いながら霊幻が返す。バスローブ姿になっていた霊幻の胸元から、色付いた乳首がチラッと見えた。
「……」
俺様は缶ビールを煽ってサイドテーブルに置く。
「霊幻」
髪を耳にかけてやりながら話しかければ、心得た霊幻は頬を手に摺り寄せてきた。
「……もっかいするか？」
返事の代わりにキスで口を塞ぐ。
「……お前とのキス、気持ちいいわ」
うっとりとそんな事を言う霊幻を、口付けながらベッドに連れて行く。
かきいだいた白い背中が気持ちいい。素肌同士で抱き合うのはいいもんだ。
「はぁっ、ん、」
さっきまで入っていたから、今もすんなり挿入る。
「ぁっ、んっ、ィイっ、」
快感を隠さない霊幻が俺に抱きついてくる。
「えくぼっ、好き、好きだっ、」
ど　く　ん。
霊素が、震えた。
色んなコイツがフラッシュバックする。
思わず霊幻の顎を掴んでマジマジと目の中を覗き込んだ。
「誰よりもか？」
「ぅんっ、好き、だいすき、」
「……シゲオよりも？」
一瞬霊幻はびっくりした顔をする。
「……うん。好き」

……言わせて、しまった。
とんでもない優越感に全身が震える。
そんなはずはない、という理性と、そうだったらいいな、という本能がごちゃまぜになって、とにかく、もうだめだ。
「ぁっ、あ、あ、はげし、イクって、なぁっ、」
なあ、霊幻。
「あ、ぁあ……っ」
お前にとってはただのリップサービスだろうがな。
「えくぼぉ……」
お前に惚れかけてる悪霊に一体何を言ったのか、
「愛してる」
そのうちたっぷり後悔してもらうぜ。

恍惚とした顔で絶頂する霊幻の中で、俺はコンドームの中に、ドロドロしたものを吐き出した。

続